

交野市部活動の在り方に関する方針

平成 31 年 4 月 1 日

本方針策定の趣旨等

学校教育の一環として行われる部活動は、スポーツ及び芸術文化、生活文化、自然科学、社会科学、ボランティア、趣味等の活動（以下、「芸術文化等の活動」という。）に興味と関心を持つ同好の生徒が、より高い水準の技能や記録・大会等に挑戦する中で、生徒に以下のような様々な意義や効果をもたらすものと考えられる。

- ・スポーツや芸術文化等の活動の楽しさや喜びを味わい、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質・能力や、芸術文化等に親しむ資質・能力を育てる。
- ・体力の向上や心身の健康の増進につながる。
- ・自主性・協調性・責任感・連帯感などを育成する。
- ・自己の力の確認、努力による達成感、充実感をもたらす。
- ・互いに競い、励まし、協力する中で友情を深めるとともに、学級や学年を離れて仲間や指導者と密接に触れ合うことにより学級内とは異なる人間関係の形成につながる。

このように、部活動は、各学校の教育課程での取組みと関連し、学校教育がめざす生きる力の育成、豊かな学校生活を実現させる役割を果たしている。

しかしながら、部活動における過度な活動等は、生徒の心身のバランスのとれた発達を妨げるという問題があるとともに、教員においても、部活動が長時間勤務の要因の一つになっている。

このようなことから、スポーツ庁が策定した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン（平成 30 年 3 月）」及び文化庁が策定した「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン（平成 30 年 12 月）」ならびに「大阪府部活動の在り方に関する方針（平成 31 年 2 月）」に則り、部活動の活動時間及び休養日の設定その他適切な部活動の取組みについて、本方針を策定する。

本方針は、中学校段階の部活動を対象とし、生徒や指導する教員にとって望ましい環境を構築するという観点に立ち、以下の点を重視して、部活動が学校・地域・活動分野、活動目的や競技種目等に応じた多様なかたちで最適に実施されることをめざす。

- ・知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育む、「日本型学校教育」の意義を踏まえ、生徒がスポーツを楽しむことで運動習慣の確立等を図り、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を図り、文化部活動については、生涯にわたって学び、芸術文化等の活動に親しみ、多様な表現や鑑賞の活動を通して、豊かな心や創造性の涵養をめざした教育の充実に努めること。その際、バランスの取れた心身の成長と学校生活を送ることができるようにすること。

- ・生徒の自主性・自発的な参加により行われ、学校教育の一環として教育課程との関連を図り、合理的でかつ効率的・効果的に取り組むこと。
- ・学校全体として部活動の指導運営に係る体制を構築すること。

1 適切な運営のための体制整備

(1) 部活動の方針の策定等

ア 校長は、本方針等に則り、毎年度、「学校の運動部活動に係る活動方針」等を策定し、公表する。

イ 部顧問は、年間の活動計画及び毎月の活動計画を作成し、校長に提出するとともに、毎月の活動実績を報告する。

(2) 指導・運営に係る体制の構築

ア 校長は、生徒や教員の数、部活動支援員の配置状況を踏まえ、指導内容の充実、生徒の安全の確保、教員の長時間勤務の解消等の観点から、複数顧問の配置や部活動に関する規定を適宜見直すなど、部活動を円滑に実施できるよう努める。

イ 校長は、毎月の活動計画及び活動実績の確認等により、各部の活動内容を把握し、生徒が安全に活動を行い、教員の負担が過度とならないよう、適宜指導・是正を行う。

ウ 校長は、教員の部活動への関与について、法令に則り、業務改善及び勤務時間管理等を行う。

2 合理的でかつ効率的な活動の推進のための指導について

(1) 適切な指導の実施

ア 校長及び部活動の指導者（顧問、部活動指導員や外部指導者等）は、部活動の実施に当たっては、文部科学省が平成 25 年 5 月に作成した「運動部活動での指導のガイドライン」に則り、生徒の心身の健康管理（スポーツ障害・外傷の予防やバランスのとれた学校生活への配慮等を含む）、事故防止（活動場所における施設・設備の点検や活動における安全対策等）及び体罰・ハラスメント（威圧的・性的な言動による指導や過度な身体接触等）の根絶を徹底する。

イ 部活動の指導者は、トレーニング効果や生徒のバランスのとれた健全な成長の確保の観点

から、休養を適切に取ることが必要であること、加えて、過度の活動等がスポーツ障害・外傷のリスクを高め、必ずしも体力・運動能力の向上につながらないことや、生徒の心身に負担を与え、部活動以外の様々な活動に参加する機会を奪うこと等を正しく理解する。あわせて、生徒の体力及び芸術文化等の能力の向上や、生涯を通じてスポーツや芸術文化等に親しむ基礎を培うことができるよう、生徒とコミュニケーションを十分に図り、できるだけ短時間に、合理的でかつ効果的な活動を行う。

ウ 指導にあたっては、専門的知見を有する保健体育担当の教員や養護教諭等と連携・協力し、発達の個人差や成長期における体と心の状態等に関する正しい知識を得た上で行う。

エ 近年、急激な気候変動等により、暑熱環境が悪化し、学校の管理下の活動、とりわけ夏季の部活動において熱中症事故が懸念されることから、活動前、活動中、終了後にこまめに水分・塩分を補給し、休憩をとるとともに、生徒への健康観察など健康管理を徹底するなどの事故防止対策を講じる。その際、「熱中症予防運動指針」（公益財団法人日本スポーツ協会）等を参考に、気象庁の高温注意情報が発せられた当該地域・時間帯においては活動を原則として行わないようにする等、適切に対応する。

3 適切な休養日及び活動時間の設定

ア 休養日及び活動時間については、成長期にある生徒が、運動、食事、休養、睡眠及び学校内外の活動等をバランスよく送ることができるよう、以下を基準とする。なお、運動部活動にあっては、スポーツ医科学の観点からのジュニア期におけるスポーツ活動時間に関する研究結果も考慮し、以下を基準とする。

○ 休養日の設定は以下のとおりとする。

- ・学期中は、週当たり2日以上休養日を設ける。（平日は少なくとも1日、土曜日及び日曜日（以下「週末」という。）は少なくとも1日以上を休養日とする。週末に大会参加等で活動した場合は、休養日を他の日に振り替える。）
- ・長期休業中の休養日の設定は、学期中に準じた扱いを行う。また、生徒が十分な休養を取ることができるとともに、部活動以外にも多様な活動を行うことができるよう、ある程度長期の休養期間を設ける。

○ 1日の活動時間は、長くとも平日では2時間程度、学校の休業日（学期中の週末も含む。以下同じ。）は3時間程度とし、できるだけ短時間に、合理的でかつ効率的・効果的な活動を行う。

イ 休養日及び活動時間等の設定については、学校や地域の実態、分野、活動目的や競技種目

等を踏まえた工夫として、定期試験前後の一定期間等、部共通、学校全体の休養日を設けることや、週間、月間、年間単位での活動頻度・時間の目安を定めることも考えられる。

ウ 学校の休業日に練習試合や大会等で3時間程度以上の活動となる場合は、生徒の健康管理を十分配慮して休憩時間を適切に設定し、無理のないよう活動するとともに、その後に休養日を設けるなど、学校生活に支障のないように配慮する。

エ 休養日及び活動時間については、学校の実態や全体の活動状況も踏まえながら今後も検討を続け、より適切に対応することとする。

4 その他

ア 事故の未然防止のため、施設・設備の点検を定期的を実施する。

イ 無理のない安全な活動メニューを心掛け、自主的に行うことを基本とする。

ウ 大会参加や練習試合等については、日程等を十分に考慮し、過度な負担とならないようにする。